

講演要旨

* は 演 者

6月26日(第1日)

1. 妊娠線に関する研究

(廣島大) 中 元 正

妊娠線の発生には體質、容積の増加、皮膚の弾力性脂肪の沈着、年齢、人種などの要素が考えられる。いま私はこれらのうち2, 3の要素について研究し、いささか従來の知見を補足するところがあつたのでここに報告する。

1. 妊娠線の臨牀的觀察では、1)妊娠線は腹部においても乳房部においても妊娠分娩回数をまずにしたがい、その出現率は増加しその程度も増強し、2)若年初産婦は妊娠線が発生し易く、高年初産婦は発生し難く、3)腹部妊娠線は浮腫のあるものに発生し易いが、尿蛋白の有無には関係なく、乳房部では乳汁分泌多量のものに発生し易く、4)妊娠線発生と季節との關係は腹部、乳房部ともに新妊娠線の発生は1年のうちでは5月が最低を示しその兩翼において高率を示している。

2. 體格と妊娠線との關係では、腹部妊娠線は狭長型において多く、身長は低いものにⅢ～Ⅳ型が多く、胸圍の狭いものほど發生率が高く、乳房部妊娠線は廣身型に多く、身長は高くなるに従い體重は重くなる程多く發生している。

3. 妊娠線の遺傳では青年期において下肢に著明な皮下斷裂線を有するものは將來、腹部、乳房部に妊娠線が発生し易い傾向があり、この事實は皮下斷裂線素質、妊娠線素質ともいふべきものの存在を認容するものである。さて私はさらにこの事實を證明せんとして、腹部妊娠線については母親 319, 姉妹 274, 祖母87, 伯叔母 213名, 乳房部妊娠線については母親 310, 姉妹 254, 祖母81, 伯叔母 202名を調査し検討した結果、妊娠線は發端者は姉妹の體質に最も類似しついで母親, 祖母, 伯叔母の序列であり、また祖母では母方の發現體質が父方よりも類似している。乳房部妊娠線の遺傳的關係については伯叔母, 祖母の關係では發端者と祖母の體質が伯叔母よりも類似していることは腹部妊娠線の場合と同様であるが、母子と姉妹ならびに祖母, 伯叔母との關係では父方, 母方の有意差は認められなかつた。

4. 妊娠線の組織形態學的觀察では、腹部乳房部の新

舊妊娠線を取材し、組織學的變化について觀察し、新妊娠線は表皮下の小血管は強く充盈し、所々において血管周圍に赤血球の漏出像を認め、かつ血管内皮細胞がやゝ纖細である。弾力、膠原兩線維の走行が亂れ、また比較的輕度に斷裂している。新妊娠線の發生時に癢痒感を發現するものがあるが、これは表皮下の血清成分漏出による蛋白の分解によるためと思考せられる。妊娠線發生後時日の経過につれ褐色となり更に白色化する機轉については上記真皮層の組織的變化に附隨し、基底層の含色素上皮細胞の重層化、鐵「メラニン」顆粒の増加が現われ、ついで角化、透明層の剝離、乳房部の扁平菲薄化、真皮における血管の減少、貧血狀態が起り、膠原彈力兩線維ともに完全に斷裂しかつ退行性變性に陥り遂に瘢痕像を形成するためである。

2. 妊産婦の體重(第2報 異常妊婦の體重變化)

(都立築地産院) 竹内繁喜

著者は昨年の總會で正常妊婦の體重變化について發表したが、今回は異常妊娠で體重に大きな變化を與えるもの、すなわち、惡阻、中毒症、双胎妊娠のそれぞれについて發表したい。昭和28年1月から30年3月迄に産院で分娩した妊産婦で、妊娠成立時の體重がはつきりしており、初診妊娠5ヵ月以前、分娩迄5回以上の診察をうけ、満期分娩(双胎例または34週以後の分娩)をした上記異常妊産婦を對象とした。年齢は殆んど20～30年である。

1. 妊娠惡阻

對象は治療のために入院した者は勿論、外來患者でも1回以上の惡阻の治療を受けた者計19例で、各週の體重變化はつぎの様である。

〔表略す〕

最高5, 最低1.5, 平均3.17kgの最大消失で、3kg以上の消失例が10例(52.6%)ある。この消失は妊娠8～12週、殊に10～14週に劇しい。しかし體重恢復後の増量は正常妊娠の場合と大差がない。妊娠成立時の平均體重は47.5, 分娩1週間後の増加量は2.37kgでこれも正常の場合と變りがない。

II. 妊娠中毒症